フィリピンレポート

－驚きの連続－

西宮愛望
仙台医療センター　研修医

今回、当院ウィルスセンター研修プログラムの一環で、東北大学-RITM 新興・再興感染症共同研究センターを拠点に、フィリピンのいくつかの医療施設を見学させていただきました。見学させていただいた病院はそれぞれその土地の中核病院といわれるところでしたが、フィリピンは想像以上に医療が行き届いていないと驚きました。

まず療養環境ですが、病院内は空調設備が不十分で暑く、病室は家族であふれており、さらには、病室が足りず廊下にまでベッドや患者があふれていました。衛生面にも問題が多く、日本では考えられないような劣悪な環境で治療が行われていました。また、医療設備・医療物資も不十分で、検査も十分に受けることができていませんでした。ICU はどの病院でもほぼ機能しておらず、人工呼吸器などの機器も不足している印象でした。

また、適切な医療を提供できるスタッフの不足を感じました。見学したどの病院でも医師が不足していました。その背景には、医師としてフィリピン国内で働くより、看護師として海外に出稼ぎに行ったほうが収入も良いというフィリピンの国としての経済力の低さがあるそうです。経済的問題を抱える患者も多く、治療費が払えないため必要な治療が受けられない人も、必要な入院治療を途中でやめて家に帰る人たちも多いそうです。

そのような現状でさえ、その現状維持には先進国のサポートが必要な状況で、さまざまな医療機器に JICA、東北大のマークがあり、JICA から派遣されたスタッフをいたるところで見かけました。今回研修させていただいた東北大学 RITM は、フィリピンにおける主要な感染症の原因病原体の解明および疫学的解析を行い、フィリピン全体の感染症コントロールを目指しています。現地のスタッフと契約して検体収集・症例収集をしていましたが、現地のスタッフは、フィリピンの医療を支えていく手助けを必要としており、このプロジェクトにも期待と希望を抱いているのが強く伝わってきました。

写真：病室は暗く狭く、付添いの家族であふれていた。病室が不足し廊下にまで患者があふれているところもあった。衛生面にも問題が多い、劣悪な環境であった。

私は発展途上国といわれている国に行ったのは今回が初めてで、文化の違いや生活水準の違い等、日本との違いに驚きの連続でした。想像していた以上の現実があり、テレビやネットを通じてだけでは知ることができなかったことを、実際に“経験”することによって知ることができました。それだけでもフィリピン研修は価値あるものだったと思います。さらには、最初は小さなプロジェクトがフィリピン全体を支えるものに成長していった過程を聞き、実際にフィリピンの医療を変えていこうと一生懸命な人たちと関われたことで、よい刺激を受けることができました。

今回のフィリピン研修は、貴重な出会いと貴重な経験にあふれた、大変価値あるものであったと思います。

写真：フィリピンの街並み。トライシクル（自転車にサイドカー が付いた乗り物）が主な移動手段。一歩町を出ると、広大な自然が広がっていた。